

第2回 絵とことば研究会

「セラピスト」はどうことばにしたのか

話題提供 佐々木玲仁 (九州大学)、穂苅千恵 (山王教育研究所)
香月菜々子 (大妻女子大学)

司会 高石恭子 (甲南大学文学部教授、学生相談室)

指定討論 川田都樹子 (甲南大学文学部教授)

2014年 12月7日(日)

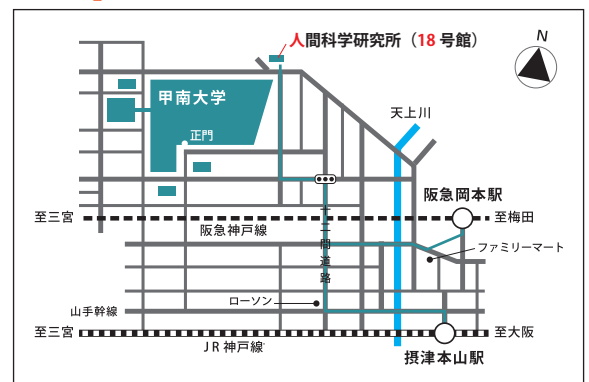
13:00 ~ 16:00

甲南大学 18号館 3階講演室

①名前 ②連絡先電話番号 ③e-mail ④専門職の方は所属先を明記し、12月5日までに kihs_info@yahoo.co.jp まで e-mail でお申込ください (定員 60名)

参加費無料

[場所]



- ・阪急神戸線岡本駅またはJR神戸線摂津本山駅下車、北西へ徒歩約10分。
- ・会場には駐車場がありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。

絵を描くという平面的な広がりを持つ行為を、ことばという直線的なものに置き換える。

いくつもの可能性の中からただ一つの因果関係を選び出していくことで、私たちはある豊かさと引き換えに「意味」を得る。

心理臨床の中で生じるやりとりで、あるいは芸術について考える中で、絵を語ること。

最相葉月氏の著作『セラピスト』(新潮社)を手がかりに、絵をことばにするの意味と可能性について、臨床実践を行ってきた立場から、また芸術療法や芸術批評の視点から、語り合う午後のひととき。どなたでも、関心のある方はどうぞご参加ください。



協力: JSPS 科学研究費助成事業 (課題番号 25284046) 「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」(代表: 川田都樹子)

共催: 甲南大学人間科学研究所 〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8丁目9番1号 Tel/Fax 078-435-2683
E-mail kihs@center.konan-u.ac.jp URL <http://kihs-konan-univ.org>



佐々木玲仁 Reiji Sasaki

九州大学大学院人間環境学研究院准教授。臨床心理士。京都文教大学臨床心理学部専任講師を経て現職。専門は心理療法における描画法、臨床心理学研究法など。2009年日本心理臨床学会奨励賞受賞。著書は「風景構成法のしくみ ―心理臨床の実践知をことばにする」（創元社、2012）、「結局、どうして面白いのか ―『水曜どうでしょう』のしくみ」（フィルムアート社、2012）、「学生相談と発達障害」（学苑社、2012、共著）など。

香月菜々子 Nanako Katsuki

大妻女子大学人間関係学部人間関係学科社会・臨床心理学専攻および同大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻専任講師。上智大学総合人間科学部心理学科特別研究員（兼、上智大学臨床心理相談室主任相談員）を経て現職。専門は心理療法における投映法・投映描画法、青年期臨床、臨床心理士のキャリア形成など。著書は「星と波描画テスト―基礎と臨床的応用―」（誠信書房、2009）など。

川田都樹子 Tokiko Kawata

甲南大学文学部教授。専門は近・現代の美術と批評。著書に「アートセラピー再考―芸術学と臨床の現場から」（共編著、平凡社）、「いま」を読む―消費至上主義の帰趨」（編著、人文書院）、「アートを学ぼう = Invention to art theory」（共監修、ランダムハウス講談社）、「批評の現在―哲学・文学・演劇・音楽・美術」（共著、和泉書院）、「芸術理論の現在―モダニズムから」（共著、東信堂）など。訳書に「グリーンバグ批評選集」（共訳、勁草書房）など。

穂苺千恵 Chie Hokari

一般社団法人山王教育研究所。臨床心理士。私設心理相談室にて、医療・教育・福祉・産業などの多領域と包括的視点から協働し、描画や夢を媒介に心理療法や心理臨床研修を行う。神奈川と福島で、親子への危機介入と虐待予防の地域支援に従事。著書に「講座心理療法第6巻心理療法と人間関係」（共著、岩波書店）、「子別れのための子育て」（共著、平凡社）など。

高石恭子 Kyoko Takaishi

甲南大学文学部教授・学生相談室専任カウンセラー（臨床心理士）病院臨床、母子臨床などを経て、学生相談の実践を長く行う。主著に「臨床心理士の子育て相談」（人文書院）、「子別れのための子育て」（編著、平凡社）、「学生相談と発達障害」（共編著、学苑社）、「風景構成法 その後の発展」（分担執筆、岩崎学術出版社）など。

絵とことば研究会とは

2013年度日本心理臨床学会における自主シンポジウムを企画開催したメンバーを中心に発足し、継続的な研究活動を行っている有志の集まりです。

2013年度日本心理臨床学会 自主シンポジウム抄録

臨床現場における描画の言語化

企画者 佐々木玲仁（九州大学）

話題提供者 穂苺千恵（山王教育研究所）

指定討論者 高石恭子（甲南大学）、香月菜々子（大妻女子大学）、佐々木玲仁（九州大学）

心理臨床の現場では、様々な形で描画が用いられている。多くの場合、ことばにすることが難しいものを扱おうとするからこそ用いられる描画法であるが、その絵から得られたものをことばにすることを求められる場面も少なくない。「描画をことばにする」という試みは、有効に作用すればそれなしでは得られなかった貴重な情報や視点を与えてくれる。しかし、この方法には定型がないだけに、どのような形でことばにすることが臨床的に有効であるかを明示するのは非常に困難であることも事実である。

また、描画表現を言語化して伝える相手も、描画者本人、共同治療者、保護者、教員、医師、福祉系専門職、弁護士など様々であり、誰に対することばであるかによって、その語りは変化すると考えられる。

本シンポジウムでは、描画を用いた臨床事例を提示し、そ

の中で描かれた描画を様々な相手（描画者本人、保護者、教員、福祉系専門職など）に伝えるという想定で指定討論者がそれぞれ「ことばにする」作業を行う。次に、ここで行われた描画の言語化を素材としてフロアとのディスカッションを行い、臨床家がどのようにして描画をことばにしていくかについての理解を深めていくこととする。

単に絵をことばに「置き換える」のでもなく、絵を「説明する」のでもないこの行為についてことばにすることは非常に困難であるが、当日はフロアとの積極的な意見交換を行うことによって、我々がどう「絵をことばにする」ことを行っているのかについて、ことばにしていきたいと考えている。また、心理臨床現場で起こっている「いわく言い難い」出来事をどのように伝えるのかということそのものについても議論したい。